

# 弘治二年再興銘をもつ 騎西町医王寺の木造薬師如来坐像について

林 宏一

Statue of the Yakushi Nyorai Buddha in the Eôuji, Kisai Town, Saitama

Koichi HAYASHI

## はじめに

ここにとりあげる医王寺の木造薬師如来坐像は、筆者がかつて所属した埼玉県教育委員会が1977年から1980年にわたって実施した埼玉県内の「美術工芸品（彫刻）所在緊急調査」においてはじめて平安時代の古像であることが確認され、あわせて像内に弘治2年（1556）鎌倉仏師長勤によって修理再興された旨を記す墨書銘をもつことで関係者の関心を集めた仏像である。以来騎西町域にのこる最古の仏教彫刻として町指定の文化財となり、町の広報紙や文化財関係の印刷物に度々紹介され、また現在刊行中の町史の資料編や通史に収録されるなどして、ようやくその歴史的、文化財的価値が広く世に認められつつある。

医王寺は、埼玉県北埼玉郡騎西町芋荃350番地に所在する曹洞宗の禅刹で、山号は海福山、観音を本尊とし、寛永元年に入寂した梅庵英大の開山と説く以外は詳しい沿革を明らかにしない。当薬師像は、医王寺境内に建つ安永4年（1775）建立の寄棟造、3間4面の薬師堂本尊として安置されるもので、行基作の伝承をもち、左右両脇に後世の補作になる日光・月光の両菩薩が侍立する。像の経歴についても詳しいことは不明だが、像内の弘治2年再興銘に「戸塚村医王寺本尊」と見えることから、中世にはすでに同寺に安置されていたことは明らかで、造立当初から現在地に伝来していたものと理解される。

ここでは埼玉県内で遺例の確認が増加している平安彫刻の一例として当像の概要を紹介し、その彫刻史的意義について若干の考察を加えるとともに、室町時代に修理再興にあたった鎌倉仏師長勤の活動内容にも触れてみることにしたい。

## 1 像の概要

さて、当像は偏袒右肩に衲衣をまとい、右腕屈臂し掌を前に向け施無畏印を結び、左手膝上におき薬壺を持ち左足上に結跏趺坐する通例の薬師如来像で、像高86.4cmとほぼ等身大のを法量を測る。頭頂部には大きく盛り上がる肉髻を表し、髪際は一文字、整然と小粒に切り付けら

れた螺髪は肉髻12段、地髪5段、髪際で36列を数える。肉髻と地髪の境目に肉髻珠、額の中央に白毫珠、そして首に三道を表し、耳朶は環状とする。

まるく肉付きのよい面部には伏し目がちの目をもつ柔和な表情を刻む。体軀も肉付きよく、



図1 医王寺 薬師如来坐像

背筋を伸ばして堂々としており、胸を大きくくつろげてゆったりとまとった薄手の衲衣には彫り浅くゆるやかに曲線を描く衣文が表されている。総じて穏和で平明な表現様式は平安時代後半に全国で流行をみた定朝様式に基づくものだが、各部太づくりで剛健かつ男性的な像容表現に個性的で地方的な作風をうかがわせるところがある(図1、3、4)。

像はヒノキ材の寄木造、玉眼、肉身部金泥彩、衲衣部黒漆塗りからなり、各所に後補の手が加わっている。構造は頭体幹部を前後二材とするが、おおきく前面材で根幹部の大半を彫り出し、後頭部及び背面部に薄く別材を寄せて内削りを施す。頭部は三道下で割首、後頭部と背面材は現状では各々別材となっているが、

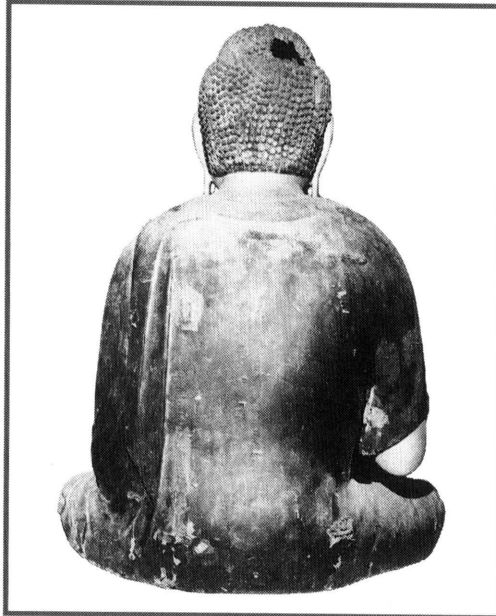


図2 同背面

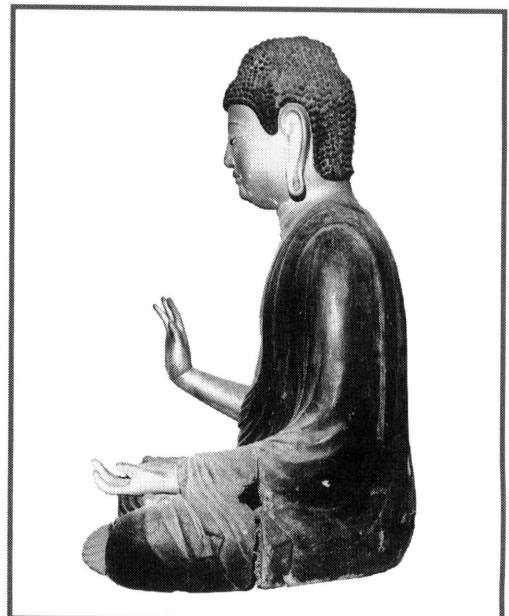


図3 同左側面

当初は通して一材からつくり襟際の線でやはり割首していたものとみなされる。その他、左側面部肩口から地付けまで別に豎一材を寄せ、右腰脇に三角材、膝前に横木一材を寄せて、各部材とも深めに内削りを施す。右腕は肩、肘、手首で別材を矧付け、さらに左袖口部、左手先、裳先部も各々別材としている。

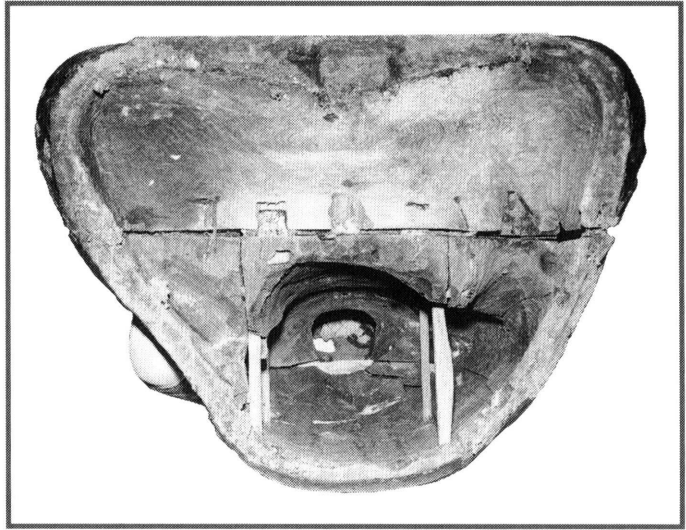


図4 同 像底

前述のように後補の箇所が多く認められる。まず両手先、

持物の薬壺、裳先が後補のものに替わり、あわせて頭頂部・左こめかみから頬にかけての面部の一部、右背面より側頭部にわたる部分にも複数の補材があてられている。さらに表面の金泥彩や黒漆塗り、当初彫眼であった両眼を改装して新たに嵌め込まれた玉眼、像内の内削り部に当てられた4本の補強用材等も後世の修理によるものである。また、現状では肉髻珠、白毫珠を欠失し、肉髻背面部右側にも大きな穴があき、各部材の矧目に緩みが認められ、保存状況は必ずしも芳しいとはいえない。

像の根幹となる頭体幹部の大半を一材から木取りする技法は、関東地方の平安時代後半の彫刻、いわゆる藤原彫刻によく見受けられるもので、埼玉県内にも類例が多い。伊奈町西光寺の阿弥陀如来坐像、川越市小中居薬師堂・同市古谷本郷薬師堂の薬師如来坐像等はその好例で、概ね当時全国で流行していた定朝様式の影響を示しながらも、いささか古風で剛健・質朴な作風を表し、いかにも東国の風土と文化的特質の反映を漂わせる作品群である。いずれも12世紀後半代の製作とみなされることから、これらと同様の様式技法を示す医王寺像もほぼ同時期の造像とみて差し支えないと考えられる。

## 2 銘文の内容及び鎌倉仏所長勤について

前述したように、当像の像内背面に次のような墨書銘が確認された(図5)。

弘治二年五月大吉日 鎌倉仏所長勤法眼

本願沙門

武州鴻荃郷戸塚村醫王寺本尊再興并彩色

正菴書記

右十方旦那助成也

これによれば弘治2年(1556)の修理再興は、沙門の正菴書記が多くの旦那に助成を募ってこの事業を興したもので、像の修理を担当した仏師は鎌倉仏所の長勤法眼という人物であった。鴻荃郷戸塚村は古名で、近世には鴻荃村、戸塚村と各々独立した村となっていることが『新編武蔵風土記稿』から知られる。医王寺の現所在地芋荃も同書では一村となっており、戸塚村の隣村として記載されているが、医王寺の名はここには無く、銘文のとおり戸塚村の条に収録されている。おそらく近代以降の村落合併の際に村境の移動があった結果によるものであろう。

本願の正菴沙門は出自経歴不詳ながら、禅宗寺院の役僧である書記の肩書きを名乗っていることから禅僧であることは明らかであり、また、このことによって医王寺がすでに当時から禅宗寺院であったことが確認される。

一方、仏師の長勤法眼については、これまでの研究によっておおよその活動歴が知られている人物である。彼は名乗りのとおり鎌倉を本拠にこの頃の武相地方一帯で活躍した鎌倉仏師で、現在のところ以下のような実績が確認されている。

享禄2年	1529	鎌倉円光寺毘沙門天立像(推定)
弘治2年	1556	当医王寺薬師如来坐像
永禄元年	1558	横須賀市往生院阿弥陀三尊像
同		東京都日の出町保泉院閻魔像
同5年	1562	箱根町興福院千手観音立像
同6年	1563	小田原市誓願寺阿弥陀如来像
同12年	1569	横須賀市本住院日蓮上人坐像

このうち弘治2年の当医王寺像と永禄元年の日の出町保泉院閻魔王像は像の再興修理であり、他は新規の造立である。これによれば、長勤は戦国期の享禄2年から永禄12年までの40年間といふかなりの長期間にわたって武相地方で仏像の造立や修理に携わっていたことが明かとなる。この時期の鎌倉仏師の活動はかなり活発なものがあリ、他にも長盛、長慶といった仏師が同じく武相地方で仏像の造立や修理に活躍している。いずれも「長」の字を共有していることから一門の仏師であったと考えられ、その先は応安3年(1370)立川市普济寺物外可什坐像の作者「朝宗」、同5年鎌倉市宝戒寺昌景惟賢坐像の作者「ちょうけい」、あるいは明德元年(1390)の川崎市能満寺虚空蔵菩薩立像や応永年間(1394~1427)の鎌倉市覚園寺薬師三尊像及び十二神将像の作者として知られる「朝祐」等、南北朝から室町時代前期の「ちょう」の字を共有す



図5 薬師如来坐像 像内墨書銘

る鎌倉仏師までさかのぼる可能性をもつ由緒ある仏師集団のひとりとみなされる。

さて、弘治2年の長勤による医王寺本尊の再興は、銘文にみられるとおり像の破損箇所への修補と表面の彩色修理であった。現在の像表面の金泥彩と黒漆塗りはさらに江戸時代の修理のものに替わっているとみなされるが、像内及び表面の観察からすると、弘治2年の時の修理は頭部欠損箇所の補修や表面彩色の修理のみならず、彫眼から玉眼への変更、両手先の新補、各部材の締め直しなど相当大規模な修理再興事業であったことが認められる。この修理箇所のなかで特に注目されるのは、彫眼から玉眼への改変と両手先の新補である。平安時代の古像を室町時代に修理するケースはよく見受けられるが、この像のように彫眼の像をわざわざ玉眼に直す例はあまり多くはない。おそらく頭頂部から面部にかけての修理箇所が多かったために、あわせて玉眼に改変したものと推測されるが、その結果当像の眼は平安時代らしからぬ中世的な伶俐な眼の表情に変貌している。これと同様のことは新補された両手先にもいえることで、施無畏印を結ぶ右手先、かるく薬壺をにぎる左手先の細やかで見映えのよい指先の表情に、概しておおらかで飾り気のない平安仏のそれとは違った中世的な写実と技巧の表れが見てとれる。これは時代の好みの反映であることはもちろんだが、さらには長勤という鎌倉仏師の個性の強い表れが示されているとみなされる。

さらにこうした観点で当薬師像の両脇侍像をながめてみると、両像の眼や手先の表情が極めて薬師像に似ていることに気づかれる。脇侍像は、垂髻を欠く左脇侍の日光菩薩像が像高60.9cm、右脇侍の月光菩薩像が68.5cm、ともに寄木造、玉眼、肉身部金泥彩、着衣部朱漆彩からなり、



図6 左脇侍像

細目がちの眼をもつ伶俐な面貌、スマートな体軀にシャープな陰影を見せる着衣をまとい、やや世俗的に品をつくって構えた両腕で蓮華を執る姿に熟練した造形力がうかがえる作品である。長勤の作風は、横須賀市往生院の阿弥陀三尊像などをみると、鎌倉時代以来の写実的で理知的な鎌倉地方彫刻の造形様式をふまえながらも、繊細で技巧的な趣きが強く表れているところに特色があり、これと同様の作風を示すこの両脇侍像も長勤によって造立補作されたもの判断してよいようである。このことからすれば、前にも触れたように弘治2年の医王寺本尊の再興事業は、本尊の修理のみならず脇侍の新補造立まで伴った大々的な内容であったことが理解され、この事業を担当した鎌倉仏師長勤にとっても持てる実力を十分に発揮した畢生の大仕事ではなかったかと推察される（図6～11）。



图7 左脇侍像背面

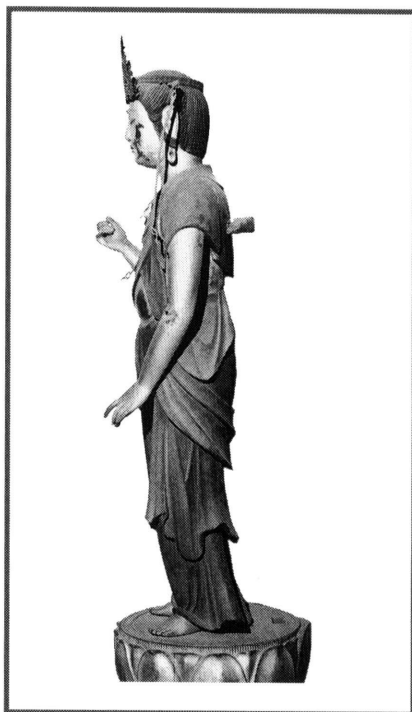


图8 同左侧面



图9 右脇侍像

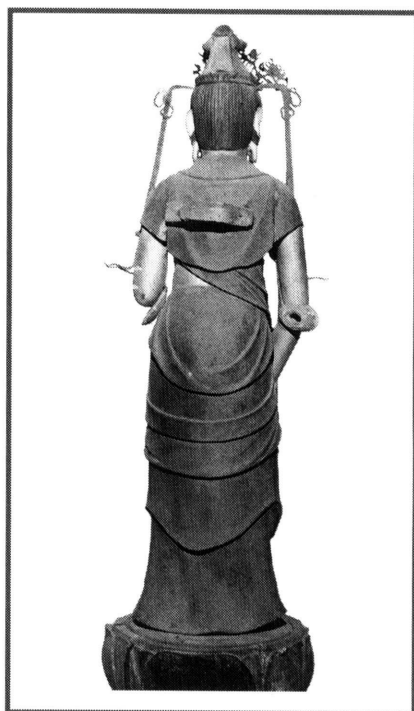


图10 同背面

### 3 その彫刻史的意義

以上述べてきたように、医王寺の木造薬師如来坐像は弘治2年（1556）の修理によって一部に改変を受けているとはいえ、平安時代後半の藤原彫刻の特色をよく表す作品である。

当時中央で流行していた定朝様式の影響をみせながらも、剛健で男性的な像容表現と古朴で頑丈な内部構造を持つところはいかにも関東的であり、同様な作風を示す作例は埼玉県内はもとより関東各地にいくつか存在している。総じて太造りで適度な量感のある体躯を持ち、側面観も体奥厚く背筋が伸び、堂々とした偉丈夫な姿を表すところに共通性がある。こうした作風は、おそらく定朝様の流入以前に関東地方に広く普及していた藤原前期彫刻の様式・技法を受け継ぐものとみてよく、そこにいかにも関東らしい藤原彫刻様式が形成されたものと考えられる。当薬師像の製作時期はおおよそ12世紀後半代、永く関東の地で活動していた

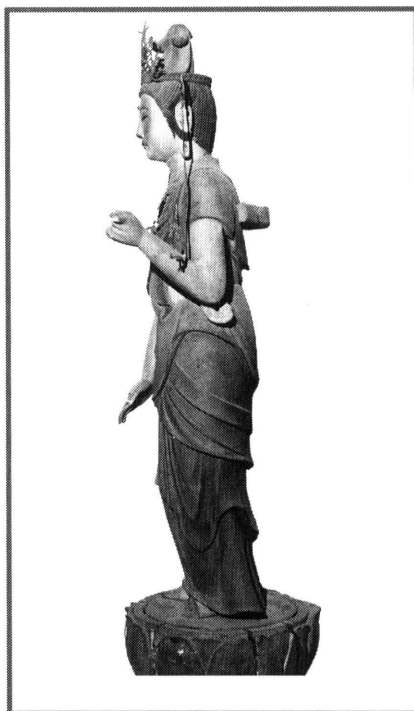


図11 右脇侍像左側面

在地仏師の造像によるものと推定され、この頃の関東造仏界の実態を知るうえに見逃すことのできない作例の一つとしてここに登録しておきたい。

また、弘治2年の像内修理墨書銘により鎌倉仏師長勤の再興するところとなり、その内容は本尊の修理のみならず両脇侍像の新補造立にまで及んでいたことが判明するのも貴重といわねばならない。このことにより、中世における古像の修理事業の一端が明らかにされるとともに、戦国期、武相地方で活躍した鎌倉仏師の一人長勤の活動範囲と実力のほどが、より鮮明に把握できたことは大きな収穫といってよいであろう。

#### 〔法量〕単位センチメートル

##### 薬師如来坐像

像高	86.4	髪際高	73.7	頭頂～顎	28.4
髪際～顎	15.8	耳張	22.4	面張	17.1
面奥	21.5	肩張	34.6	臂張	51.8
胸奥	23.0	腹奥	28.5	膝奥	48.5
膝張	66.8	膝高（左）	11.5	（右）	12.5

##### 左脇侍（日光菩薩立像）

像高	63.9	髪際高	60.2	頭頂～顎	11.2
髪際～顎	7.6	耳張	9.2	面張	7.1
面奥	9.9	肩張	11.6	臂張	20.5

胸 奥	10.1	腹 奥	10.7	裾 奥	10.1
裾 張	16.3	足先開 (内)	8.4	(外)	12.5
右脇侍 (月光菩薩立像)					
像 高	68.5	髮際高	60.0	頭頂～顎	16.1
髮際～顎	7.5	耳 張	8.9	面 張	7.1
面 奥	9.6	肩 張	11.6	臂 張	20.2
胸 奥	9.5	腹 奥	10.8	裾 奥	10.0
裾 張	16.9	足先開 (内)	8.4	(外)	12.5

### 参考文献

- 『美術工芸品 (彫刻) 所在緊急調査報告書Ⅱ』 昭和61年3月 埼玉県立博物館  
『鎌倉の彫刻』 三山 進 昭和41年3月 東京中日新聞  
『鎌倉の在銘彫刻Ⅱ』 鎌倉国宝館図録第8集 昭和61年3月 鎌倉国宝館  
『騎西町史 考古資料編Ⅱ』 平成11年3月 騎西町教育委員会

### [後記]

この小稿は、平成11年3月29日に刊行された『騎西町史 考古資料編Ⅱ』第3章仏像・什物「弘治二年再興銘医王寺木造薬師如来坐像」に執筆した内容をもとに、改めて論文用に加除修正したものである。掲載にあたっては、騎西町教育委員会及び同委員会社会教育課郷土資料係長正能晴雄氏に御配意を賜った。記して謝意を表したい。

また、薬師如来及び両脇侍尊像の写真を使用するにあたっては、医王寺御住職大橋幸雄師、埼玉県立博物館の御理解と御協力を得た。ここに記して心からの感謝の意を表したい。